氏　　名　飯田　卓（いいだ　たく）
学位(専攻分野)　博士（人間・環境学）
学位記番号　人博第103号
学位授与の日付　平成12年5月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目　マダガスカル沿岸漁民ヴェズにおける市場経済の受容
——その生業と家計経済に関する人類学的研究——

論文調査委員　（主査）教授 金坂清則　教授 市川光雄　教授 小山直樹

論文内容の要旨

本論文は，マダガスカル島南西部海岸のサンゴ礁地帯に住む漁撈民ヴェズを対象にした人類学的研究である。とくに，これまで先行研究がほとんどなかったヴェズの生業活動について詳細な記述を行うとともに，漁撈における協業や食生活，漁家の家計等について，自然環境条件や外部の社会経済的条件と関連させながら論じている。

論文ではまず第1章の序につづき，第2章において海岸部の調査村と4キロメートルほど内陸に入った村との比較を通して調査村の特徴を明らかにしている。すなわち，両村における生業活動の頻度や，漁獲高と農地面積，食生活（食材とその入手方法）などの比較から調査村を漁村として位置づけるとともに，わずかな距離によって生業，食生活，経済が大きく異なることを示した。また，両村とも水産物や農産物の商品化を通して市場経済に組み込まれてはいるが，主食を全面的に外部からの購入に依存している調査村（漁村）の方が外部条件の変化に伴うリスクが大きいことを指摘した上で，それにもかかわらず調査村が漁業に専業化している経済的要因として，現金収入源としての漁業の魅力と漁獲の安定性があることを指摘している。

次に第3章においては，調査村の地先海岸における漁法や漁撈活動や漁家経済の実態等についての記述と分析を行っている。そして各々の漁法の実施頻度や漁民の出漁頻度と時刻，操業時間，漁獲物の種類と量，自家消費量や売却額などに関する詳細な記録の分析から，以下のような指摘を行った。第1は，調査村においては，潮汐差を利用した漁法が多いことや，特定魚種に特化せず多様な魚を少しずつ捕るような漁法が多いこと，定着性の水族を対象とするために漁法や漁獲効率にほとんど季節差が認められないこと，漁船や漁具が小型で少人数で漁が行われることなどに見られるように，漁撈がサンゴ礁の自然環境条件に強く特徴づけられていることである。第2は，すべての漁獲を売却したとしてもその額は主食購入に必要な費用をわずかに上回る程度であったが，実際に売却されて主食購入のために使われたのは漁獲の一部だけであり，地先における漁撈だけでは漁民の生計は維持できないことである。第3は漁撈活動にあたっては複数の世帯が協同することが多いが，そのような世帯の間では，男女の役割分担のほかに，男性同士の間でも，出漁頻度の調節や漁撈と他の活動の分担等に見られるように，柔軟な役割分担の体制が保たれていることである。

第4章では，漁家の生計をまかなう収入の大半が遠隔地への季節的な出漁によるものであることを指摘し，そのような遠隔地における漁としてのサメ刺網漁と潜水ナマコ漁について，漁法や漁撈活動の実態，漁獲と加工・販売等に関する記述を行った。同時に，これらの遠隔地出漁が近年盛んになった背景として，遠隔地出漁では漁獲高が大きく漁獲効率も高いこと，および，遠隔地出漁の収入が漁具や漁船等の投資資金や，衣服・ラジカセ等の高額な消費物資の購入費，そして地先の漁ではまかなえない主食購入費に使われ，ヴェズの家計において不可欠になっていることを論証した。また調査村では，遠隔地出漁によって短期間に大量の漁獲と収入を得たあとは，その収入を少しずつ使いながら生活するという，年間を通じた生産-消費サイクルに従って家計を維持していることを示し，ヴェズの家計が従来考えられていたような採取漁撈民の短期完結型の経済とは異なることを明らかにした。さらに，遠隔地出漁を始めた経緯の分析から，1970年代に新たに商品化されたカ

タクチイワシ科の小魚やナマコ等の地先資源が枯渇状態に陥った結果，遠隔地出漁が活性化したことを示すとともに，こうした事実は，漁民が地先漁撈の停滞期に手持ちの技術や知識を駆使して新しい漁場と漁法を開拓すること，いいかえれば市場経済の波に主体的に対処していることを意味すると指摘している。

最後に第5章においては，遠隔地出漁の経済的重要性を踏まえた上で，村の地先漁撈の重要性を再検討している。地先漁撈は，現金収入の点では副次的な意義しか持たないが，漁撈における革新の母胎として重要である。すなわち，地先漁撈の実践を通して歴史的に培われてきた技術や知識こそが，自然環境や社会経済的条件の変化に対処するよりどころであり，潜在的なリスクを抱える漁民生活を安定させる方途を与えるものだとしている。こうした議論に基づいて，ヴェズの漁撈活動が社会経済的諸条件に影響されながらもそれを打開する可能性を秘めていること，また彼ら自身が，伝統的な漁撈活動よりも，むしろ革新と創造をとりいれた漁撈活動にアイデンティティの根拠を求めていることを指摘し，ヴェズにとって漁撈とは，現在において生計を立てる手段というだけではなく，将来の生活を切り拓くための「資本」でもあると結論づけている。

論文審査の結果の要旨

アフリカ大陸東方のインド洋上に位置するマダガスカルでは，東南アジア由来の稲作や東アフリカから伝えられた牧畜など，さまざまな生業を組み合わせた生活が営まれており，文化史的，民族学的にも興味深い生業や文化が認められるが，沿岸漁業においてもアウトリガー付きのカヌーを利用するなど，他のアフリカ地域には見られない特色が存在する。本論文は，マダガスカル南西部の乾燥地帯沿岸部に居住する漁撈民ヴェズについての生態人類学的及び民族誌的な研究である。

ヴェズはマダガスカルにおいて唯一，漁撈に強く依存した「海の民」として知られており，これまでの人類学的研究においてもしばしば彼らのアイデンティティの根拠は漁撈にあると指摘されていた。それにもかかわらず，従来の研究は社会組織や葬制，民族的アイデンティティ，動植物に関する民族知識などの研究に偏っており，ヴェズが日常的に従事する漁撈に関わる自然的基盤や，技術的・経済的側面についてはほとんど言及されてこなかった。本論文は，周到に準備された方法によって収集した定性的，定量的なデータをもとに，ヴェズの漁撈活動に関わる自然環境や，漁撈と農業等の他の生業との関係，漁撈における協業，漁獲，分配と消費，加工・販売，食生活，そして漁家経済など，漁民生活に関わる全体像を把握することを企図したものであり，優れた民族誌的研究として位置づけることができる。とくに，これまでアフリカ地域の沿岸漁民に関するまとまった研究がほとんどなかったことを考慮すれば，本研究の民族誌的価値はきわめて高いものといえよう。

このような資料的価値に加えて，本研究には以下のような貢献がある。

第1に，マダガスカルのサンゴ礁海域における漁撈活動が，潮汐リズムや月齢，地形，水深，魚族の生態や習性などの地域の自然環境条件といかに密接に関わっているかが，漁撈活動に自ら参加しつつ観察することを通して，きわめて具体的に記載されている。これによって，ヴェズが行う小規模な漁撈が長年の経験にもとづく漁民の技術や知識・知恵などに大きく依存していること，そして，それ故にヴェズにとっては漁撈がアイデンティティの根拠になっていることが説得力のある形で示されている。

第2に，ヴェズの漁撈がこのように地域の自然的条件に強く依存しながらも，市場経済と強く結合していることが，漁撈活動や家計に関する定量的なデータから明らかにされている。とくに数ケ月の間，遠隔地に出漁することによって，乾燥ナマコとして輸出するナマコや，フカヒレとして輸出するサメを採取・捕獲し，そこから得た収入によって漁具・漁船や，主食その他の消費物資などを購入する費用の大半がまかなわれていることを示し，マダガスカルの辺地の零細漁民に対しても国際的な市場経済が大きな影響を及ぼしていることを具体的に明らかにしている。

第3に，家計と食生活の分析から，地先海岸における漁撈だけでは主食の購入にも不足をきたすことを示すとともに，ヴェズが遠隔地への出漁と地先漁撈を結合させて年間の生計を組み立てていることを指摘しているが，この指摘は，アフリカの採取・漁撈民に適用されてきた「短期完結型の採取・漁撈経済」という従来のイメージの変更を迫るものである。

第4は，ヴェズが市場経済に深く結びつけられながらも，決してそれに受動的に流されているだけではないことを指摘した点である。すなわち，遠隔地出漁に至る経緯の分析から，ヴェズが地先漁撈において培ってきた技術をもとに，新しい市場経済の要求と地先海岸における資源枯渇という状況に対処するために遠隔地出漁に踏み出したことを示し，新しい状況における漁民の主体性と，そのような主体性を支える変革の母胎としての地先漁撈の重要性を指摘している。この指摘は，直

接的な経済的利益が小さいにもかかわらず地先漁撈が維持されていることに対して，経済的潜在力と漁民のアイデンティティの維持，すなわち経済と社会・文化の両面から説明を与えるものである。

以上のように本論文は，漁撈活動に関する参与観察と聞き込み調査によるデータをはじめ，出漁状況や漁獲，販売量，食生活等に関する統計的なデータ，歴史的経緯についての口承データなど，性質の異なった資料を巧みに結合させて厚みのあるモノグラフとしてまとめられている。また，漁撈に関わる個別地域の現象を市場経済などのマクロな状況と関連させるとともに，歴史的経緯にも着目しながら論じている点において，人類学と地域研究を結合させた研究として高く評価できる。さらに，人間社会論を比較地域構造論の立場から具体的に論じた研究としても優れている。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成12年４月７日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。